



部落解放への道

解放へのきざし

部落は「人外の人」として身分職業、居住地の制限によって差別されていたのですが、江戸時代の中ごろすぎから幕府や藩は部落をいっそう抑圧する施策を強めました。その理由の主なものとは二つあります。ひとつは、この頃になると経済社会が発展してきて今まで四民の一番下におかれていた商人の力が強くなり、幕府や藩や武士たちも商人から借金したりしてその意見を無視できなくなり幕藩体制の基礎である身分制度がゆるみはじめたことです。もう一つは、この頃から部落の人口がしだいに増加し、賊民身分の者が農業や商工業にも進出し、経済力も高まり生活上をねがって身分差別に抵抗するという傾向が現われはじめたことによるものでした。

地から離れた貧農のあとをついで小作人になったりして農業にたづさわるものが増えてきました。また農業のかたわら牛馬の売買や農産物の加工、染物の商いなどとして農工商の人びとと接触するうち部落を抜け出す者が増加しました。また一方では幕府や藩では政治的な失敗があったり、重税に苦しんだ農民や町人の不平不満が高まってくる、これをそらすため部落に對するしめつけを強化しました。日常生活や服装にいたるまで細かに規制し部落の人と庶民との生活習慣のなかで格差をつけ差別を強めるよう仕向けてゆきました。（これによって部落の人びとに對する差別意識は農民をはじめ町人のなかにも根深く浸りこみ、この一部が今日の社会にも持ちこざれていることも見逃してはなりません）こうして強められた差別に對して部落の人たちも解放へのたち上りをみせはじめました。

また部落の人びとも、百姓一揆のとき役人村として、つねに鎮圧の手先に使われていたのではなく、ときには一揆に大勢参加して支配者側と戦いました。寛延六年の姫路藩の一揆、天明二年の和泉北路藩の一年の紀州の大一揆などに参加し、幕末の天保四年播州加古川から丹波にかけての大一揆では部落住民が主要な役割を果たしました。しかし一揆が終れば農民と部落の人たちとはまた別々になるという状態で、お互いが差別をうけているという共通理解には至らず一揆を戦うのに都合がよいので利用しただけで済んでいました。

部落をつくりだし、差別を強化してきた幕府も、幕末になり世の中が大きく変わり、自己の存亡にかかわるようになると積極的に部落を利用しようとした。慶応二年（一八六六年）の第二次長州征伐のとき弾左衛門の配下五百人を軍夫として動員し大阪に送りま

した。これに對して長州藩でも百姓、町人の勢力も加えて奇兵隊を中心とした諸隊を編成して戦いましたが、藩ではこの中に部落民も動員しました。これらの部落民は幕軍と各地の前線で戦い、とくに雲州口の戦いでは幕軍の精銳部隊を破るなど華々しい功績をたて、長州軍ばかりか幕軍をも驚かせました。

しかし、これら部落民の登用も軍事危機に際して部落民を利用しようとしただけで、部落の人たちが期待したような身分解放の方向には進みませんでした。それでも慶応四年に幕府は長州征伐に功があったとして、弾左衛門とその直接の手下六十数人だけを、えたの身分を除いて平民に引上げました。が他の多くの部落の人びとは解放されませんでした。